
神は死んだ！ 【リリカルなのは二次創作 オリ主転生最強物】

ホーグランド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神は死んだ！ 【リリカルなのは二次創作 オリ主転生最強物】

【Nコード】

N8044P

【作者名】

ホーグランド

【あらすじ】

この設定面白いかも、と思った方は今すぐ感想を。

Arcadiaでも連載中。

プロローグ

「俺の培地にまたBETAが繁殖しやがった！」

「ははっ、またかよー。お前、すぐコンタミさせるからだめになるんだよ」

「しょうがないだろう？ 俺の手が不器用なのは、生まれ付きなんだから」

同じ研究室の友人の声を聞き流しながら、俺は目の前の丸い培地に集中する。この作業にはいつもの三倍ほどの注意が必要だ。そうでないと先の会話のようにBETAみたい物が繁殖して、人間が絶滅してしまう。

俺の名前は森恪。実は神だ。……待て、そこ、引かない。

「くっそ、他の培地も絶滅しやがった！ ……なんだ、キモオタの俺に神様はなんか文句でもあんのか！」

隣でこう叫んでる、彼女持たない歴二十二年の田中俊夫も神だ。

「いや、神様はそんなただの人に興味も糞もないだろう」

冷静に突っ込んでるメガネ君、俺の友達の西尾徹もまた神である。いや、正確に言えば『昔の人間』にとっての神だが。

「おい、森。さっき奈多先生が読んでたぜ」

「げっ、またあの奈多かよ…… 大丈夫だ森、骨は拾ってやる」

チーンと声で効果音を出し合掌しているバカ二人は繰り返しているが、神だ。

「はあ、今度は何をさせられるんだろうか」

彼の言葉を聞き俺の向かうは、先の会話に出てきたこの大学名物の教授、奈多慎吾教授の研究室である。

今までの会話で察しの良い方はお気づきだろうが、ここはある地方大学の研究室。そして俺はしがない一研究生である。

そんな全く健全である俺が『神』なんて、口に出せば一発で基地外判定されてしまうような言葉を自称していたか？ それは、俺の生い立ちを説明しなければならない。

全くもって今でも謎であるが、俺は前世という物を持っている。

正直、こっちに生まれてそれなりに苦労したがそれは置いておこう。説明してもつまらないだけだ。

さて、そんな不思議な過去をもつ俺だが転生した当時はここが日本のどこかだと思ってた。だって言語も丸つきし日本語だしね。服装も普通だったし。強いて言うなら俺の居た時代よりかなり科学が発展してるなあ程度の認識だった。

そんな自分の認識を真つ二つに折ってしまったのが、この世界の理科の授業である。教科書の126ページ、あの時の衝撃を俺は一生忘れないだろう。

俺の記憶が正しければ、そこにはゾウリムシやらが書いてあるはずだった。しかし、そこにあったのはどう見ても前世で見た人間そ

のものだったのだ。

……は！？

俺は目を疑ったね。前の世界で『大腸菌』やらに当たる生物がこの世界では人間であつたのだ。

だからこそ、俺は前世とは全くの見当違いである理系に進み、農学部に進学。無事、こうやって『バイオテクノロジー』らしいことを習ってるんだが……

こつちでいう『バイオテクノロジー』は大腸菌を人間に置き換えたもの。前世では例えば人間に必要な物質を菌に造らせて、それを抽出したりして得ることもあつたが、それを人間っぽい小さな奴ら（＝俺の前世である人間）にやらせると思って貰いたい。

だからこそ、この大学では菌（人間）を育てるために培地（こつちでは育てる用に予め用意されている『粉』みたいなのをこねて作る）を作る方法などを習ったりするのだ。

つまり、人間（のような菌）を培養したりするのがこつちのバイオテクノロジー。俺の前世である生物が、こつちで菌のように培養されたりしている光景は最初気持ち悪かったがもう慣れた。人間ってすごいね。

星（培地）こねて作って、それに菌（人間）移植させ、培養させる……これを神と言わずして、なんと言おう。

では、軽くこの世界の培養の手順を追ってみよう。

まず、培地をこねる。こねて丸い球状にする。これからの作業はすべて無菌でやらないといけない。もし、無菌状態でやらなければ

人間じゃないやつが混ざってしまつて大変な事になる。

次に、培地に培養したい物を移植する。種菌を白金耳（耳かきみたいなやつだ）で掬い取り、その培地になすりつける。種菌とは俺たちが代々培養してきた人間だ。いちいち、単細胞から人間まで進化するのを待っているのはダルイからな。

この時、白金耳の先を顕微鏡で見るとなにやら戸惑った顔の人間たちが見えたりする。

そして無事に移植出来ればあとは待つだけ。それ専用の保温室に入れる。中は熱すぎず寒すぎずに保たれている。地球にいた頃、なんでこんなに地球は奇跡的に恵まれた環境にあるのかと思つたが、答えは簡単だ。俺たちが管理しているからだ。

数日経つと、培地の表面にコロニーが出来始める。ああ、この時顕微鏡で表面を観察すると街らしきものが見える。ははあ、こいつらやっと文明作りやがったな、こやつらめ、と気分は一端の親の気分だ。

さらに数日経つとコロニーがどれか分かんなくなるぐらいドベーと広がるので、実験などではコロニーができた当たりで止めるのが普通だ。でも今回はそのままにしておくとうなるか、それを説明してみよう。

菌が広がって培地がすべて覆われると、彼らは孢子を出し始める。この前、孢子をとって観察してみるとなんか宇宙船チックだった。

さて、大体そこまで広がれば無菌状態じゃなくても培地は大丈夫なんだが、時々変なもんが混ざって菌（人間）をダメにしてしまうことがある。先の会話に出てきたように、大切に育ててきた培地が一瞬でやられてしまうこともあるから注意が必要だ。

そこまで説明したなら俺が冒頭、神だと自称した理由もわかるだろう？

というようなことをつらつらと考えていると、何時の間にか俺は教授の部屋の前に立っていた。正直、悪い予感しかない。教授は悪い意味で有名だ。特に変な発明品を作っては学生に試させるという点で。

そして、その生贄としてよく俺が対象に選ばれるも、俺の彼に対する評価が下がる一因に他ならない。

帰りたい気持ちを抑えて、俺は教授の部屋を開けた。そこには顕微鏡を一心不乱に見つめながら、作業している教授がいた。

「……教授、森です。何のようですか？」

声に若干の苛立が混じってしまうのも無理はないだろう。彼に關わって俺にいいことがあった試しがない。

振り返った教授は満面の笑みで俺を迎えた。主に新たな獲物を見つけた、そんな笑顔だ。

「おお、森君。待ってたよ！ 今回こそ大発見だ！」

「はあ、いつもそれ言ってますよね？」

イメージ的には中松さんを思い浮かべて欲しい。

「いいや、今回は大発見だよ！ 紫外線を放射して有用な変種を見つけたんだよ！」

「!?!? …… どんな変種何ですか?」

「魔法が使えるんだよ」

「マホウ……? それは、こう、宙に浮いたりみたいなのやつですか?」

「ああ、そつだよ…… ってそんなに胡散臭げ顔で見ない! そんなに言うのなら、ほれ、顕微鏡で見てみなさい」

訝しげな俺の顔を見たのか、そばにあつた顕微鏡をすすめる教授。中を見ると、そこにはなんか子供が空を飛んでた。

「…… 飛んでますね」

「だろう?」

顕微鏡から目を話すと、うれしそうな顔をした教授がいた。正直、キモイ。

もちろん、この世界でも魔法なんてもんは存在しない。ということとは、魔法を使う変種なんて見つけたのは大発見ということだ。しかし、自分と呼ぶ必要性は見つからない。

「で、俺に何をさせようっていうんです?」

「それなんだが……」

奥についてきてくれといった教授に付いていくと、奥には今巷で流行中のバーチャルゲームの操作ポットが置いてあつた。

「これをどうするんです？」

「いや、魔法なんて物を使える変種を発見したのはいい。しかし、まだその生態は謎に包まれたままだ」

「はあ、じゃあよく観察すればいいんじゃないでしょうか？」

俺の最もな意見に、ノンノンと指を教授が振る。

「それじゃ遅いのだよ、君。世界では、この瞬間！ この天才のライバル達が必死に研究しているんですよ！」

自分の世界に入った教授を尻目に、俺はポッドを観察する。

技術がかなり発展したこの世界では、もちろんゲームの類も存在する。それらは実際に起きているかように人間を錯覚させ、体中を実際に動かしているようにアバターを動かすこともできるという高性能なものだ。

過去にはあまりにもリアルを追求しすぎたクソゲーもあるが、いまはその問題も解決されて面白いゲームが楽しめると聞いている。が、なんでこれがこんなところにあるんだ？

「何故、こんなものがここにつて顔をしているね？ 君」

振り返ると教授が何かをピンセットでつまみながら、こちらを見ていた。

「その、つまんでいるものは何ですか？」

嫌な予感をビシビシと感じながら聞いてみる。帰ってきた言葉は

予想通り俺を不安に陥れるような物であった。

「これは、君になってもらうアバターだよ」

「はあ！？ 俺がそのアバターを操作するですって!?!」

彼がつまんでいたアバターらしいものを顕微鏡で見ると、そこには俺によく似た男がいた。

「凄いですね、これ。こんなに小さなよくできた人形、初めて見ました」

「しかもそれは動くんだぞ」

「マジですか!?!」

これが動くとか……正直、こっちの方を学会の発表すべきじゃないかと思っていたが、彼には言わないことにした。

「君にやつてもらいたいことは一つ。このアバターを先のバーチャルポットで操作してこの変種の生態を探るのだ!」

「はあ、でも問題だらけだと思いますが」

「何だね、言ってみなさい」

「そのアバター、丈夫なんですか？ そんなに小さい物だったらすぐ壊れるんじゃない……」

「大丈夫だ。さっきシャーレの三十センチほど上から落としてみたけど大丈夫だった」

培地の大きさは直径十センチほどだ。つまり菌の基準で地球直径の三倍ほどの高さから落としたということになる。

それでも壊れないということは、かなり丈夫なのだろう。

「そうですか…… でも、彼らの体感的な時間と自分の体感する時間はかなり違いますか？」

アリとゾウの体感する時間はかなり違う。体感時間はその体の大きさに比例する。菌みたいな彼らと俺の時間たるやかなり超絶した物になるのではないか？

「バーチャルで何とかなる」

何とかかなりそうだった。

「でも、でもですね、彼ら菌たちが全員友好的だとは限りませんよ。へたすると、敵対してくるかもしれません」

「大丈夫だ！ そのアバターの中に受信機を付けておいた！ その発信機からエネルギーがそのアバターに届くはずだ」

彼の指差す方向には年代物の機械が置いてある。ネジがバカにな
っているやつだ。

「……本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、こう手からビーム的なのが出るから心配するな、なん
とかなるはずだ」

「……あれですよ、こっちで少しバネがずれた時点でこっちでは洒
落にならないほどの変化が起きるんですよ！ そこら辺、分かつて
ます！？」

「多分、大丈夫だ」

自信満々に言い切った教授に、ため息をつくも俺は諦めた。これ
以上言っても教授が折れないことは過去に経験済みだ。

「じゃ、まずこの一番発展してるっぽいやつに放りこんどくな」

と、教授はピンセットで俺がなる予定のアバターを掴んで、ぽい
と培地の中に軽く、鼻くそを飛ばすような軽さで飛ばした。

「ああ、もう！ そんなに適当に扱って！ それは俺になるんです
からもっと大切に扱ってくださいよ！」

ハハハ、すまんねと笑いながらポッドへと誘う教授を睨めつけな
がら、俺は観念してポッドの中に入った。

「電源入れるぞー、同期するからなー」

くぐもった教授の声が聞こえたと思うと、俺の意識は闇へと落ちていった……

次に意識がもどると何やら宇宙空間っぽいところで漂っていた。
や、やべ！ 息できねえよ！

『大丈夫だよ、森君。息はしなくて大丈夫だ』

忌まわしい教授の声が頭の中に響いた。なんじゃこら！？

『そのまま、そうだなあ。どこか近くに何か見えるかい？』

周りを確認すると、近くに宇宙船らしいものが見える。それを教授に伝えるとそれに入れと返事があった。

近くにクロールで泳いで（宇宙って泳げるんだね）近づくと、何やらハッチみたいなのが開いてた。近づいて入ってみる。

中は昔前世で見た、テレビに写っていた宇宙船のようだった。こんな物を『菌』が作ったのだと思うと趣深い。

しかし、中は無人だ。誰かいてもいいとおもうんだけどなあ。もうしかして、これって漂流船？

もつと詳しく中を見てみる。エステシア？ なんじゃこれ？ 名前が書いてあったが、これがこの船の名前なのかね？

どこかでどうも物音がする。はあ、ゼツタイなんか言われるよ。見つければ、速攻『不審者だー！』なんて言われて追われるんじゃない？ これ？

いきなり痛いのは嫌だ。さっき確認するとこれ、痛みもリアルに感じれるという意味不明な仕様だったし。拷問とかされたらどうすんの。

『教授ー、力の使い方教えてくださいよ。ビーム？ でしたっけ？ それってどうすればでるんですでしたっけ？』

『こつ、右手を前に出してだな、指の先に力を込める感じ？』

『いや、感じ？ って聞かれましても……』

聞いたことを取りあえずやってみる。こつか？

『ビュン』

「へっ？」

俺の情けない声とともに指先から白い光が溢れ出てきた、あれ、これ、止めれなくなっ？

あっという間にその指先から生まれた光は宇宙船をも飲み込み、半径十キロに存在するものすべてを消し飛ばしてしまった。

第一話 騒動の始まり

『ああ、彗星の正体だって？ …… ハウスダストだよ』

モリ・カク ミッドチルダ

特派員の質問に答えて一言

『第一話 未知との遭遇』

目の前の全方位が真っ白に染まる。ビームを出したと思ったら、周りが木っ端微塵に吹き飛んでいた。頭がどうかなっちまいそうだった。

白い光が収まると、俺は一人宇宙空間に漂っていた。頭の中に教授からの連絡が入る。

『おい、森君。大丈夫かい？』

『あー、はい。俺の体の方は何とかかなりそうなんですけど……』

と、手をにぎにぎしながら答える。首を180度見回しても、先程見た宇宙船らしき構造物は見当たらなかった。

『……教授うー 先のビームとやらがなんか強すぎて、一個宇宙船が吹き飛びました』

おかしいなーなんて、脳天気な声を出している教授をぶん殴りた
い。

『でも森君。こっちの送信機のネジはオフになってるけどね』

『オフ？ 切ったままなんですか？』

『ああ、触って無かったからね。電源プラグは刺したけど。ツマミ
はねじってないよ』

そつえば、母さんにこまめに電化製品のコンセントは抜いてお
けて叱られたっけな。

待機電力、だっけか？

『……教授、多分、ですけどその待機電力カットしてもらえせん
か？』

『コンセントを抜くってことか。了解』

抜いたことを知らせる声を聞いて、俺は今度は小指だけに力を込
める。

……出てこない。

『教授、やっぱり待機電力ですよ。というわけで、コンセントさし
たらもつと遠くに置いてください』

『んー、コンセントが邪魔だなあ、これでどうだ』

もう一度、俺は荒ぶる右手を前に出して力を込める。こう、第二関節に力をかける感じで……どっせい！

『ビュオワ！』

今度は俺の右手から腕の太さほどの大きさのビームが飛び出た。その一筋の光はこう、宇宙空間を瞬く間に進んでいった。

まあそうだろうな。ビームって光速だから目で追える訳がない。多分、どっかの培地にでも当たるんだだろうけど。

『教授、いい感じです！ この距離をキープしてくださいね！

くれぐれも、ツマミを回したりはしないように！』

『うむ、先話を聞くと一度でも回せば貴重な変種たちが一気に全滅なんてことになりかねんならな』

『そうですよ、教授。せっかく金山を掘り当てたんだから、それ自分で爆破しちゃあ世話ないです』

『それもそうだな』

『『ワハッハッハ！！』』

「あー、その君！ 笑っているとこすまないが、こっちの話を聞いてくれるかな」

「へ？」

気がつく、何か武装した人たちに囲まれていた。困惑した様子でこちらをみているおっちゃんの顔は少し歪んでいる。

「あーあ、こう言っちゃなんだが……」

言い出しにくそうな顔をしていたので、俺はそのおっちゃんを助けることにした。というかいつまでも宇宙空間で油売ってるわけにはいかない。

「どうしたんですか？」

「ここは宇宙だし、裸は寒くないのかね？」

俺は、マッパで漂っていた。

「いや、君がマッパで宇宙に漂っているのを見たときは、心臓が止まりそうだったよ」

あつははと気さくに俺に声をかけてくれるのは、先程声をかけてくれた俺のファーストコンタクト菌。エンクルマ執務官だ。話を聞くと、巡航艦からレスキュー信号をうけた彼らは、その地域に向かう途中、謎の爆発を感じ。急行するとそこにはマッパの成

人男性が高笑いしていたというのだ。

「でも君は丈夫なんだねえ、素肌で宇宙空間をクロールとはなかなか剛毅だよ」

「いや、そんな事ないですよ。俺の肌なんか年中肌荒れがひどくて、ボディーソープなんか弱酸性使ってますから」

「そうなんだ。それは大変だね。ところで君は次元遭難者だって聞いたけど」

先の話が大分スムーズにいったのは、この培地では時々他の世界から人が紛れ込んでくることがあるからだと聞いた。たぶん、それは教授がピンセットで暇つぶしに他の菌を運んで遊んでいるからなんだと思うけど。

『まあ、そうだよな。だっていきなりピンセットで摘まれた人間、面白い顔すんだもん』

とは、教授の弁である。

「はい……たぶん、そういうことになってると思うんですけど」

「そうか、俺たちの本拠地、あ、ミッドチルダって言うんだけどね？ 取りあえず、そこでいっぱい書類とか書かないといけないから、そこまで取りあえず送っていくよ」

「ありがとうございます。色々と親切にしてもらって」

「いいことよ！ これで給料もらってるんだからね」

と何とか、魔法使いの国に密入国なんかせずに入れそうだ。次元漂流者か……教授の暇つぶしのおかげでなんだか楽に調査が進められそうだ。

『こういうこともあるのかと！ と一度いつて見たかったんだよね』

……まあ、あとはこの国には『レアスキル』なるものがあるらしい。どうも科学で解明できないとかオカルトチックなやつらしいが、宇宙クロールも

「レアスキルデス」

といえば、何とかなった。便利な言葉だレアスキル。なんて凄い言葉だレアスキル！ ガンガン多用していこう。

「エンクルマ執務官、ありゃ、何ですか！？」

先の取調室兼軟禁室から出てきたエンクルマを、囲んだのはクル

「達であつた。彼らがあの宇宙クロールを最初に発見したのだ、気になるに決まつてる。」

「……レアスキルらしい」

「……執務官、それ、本気で信じていませんよね？」

頭ダイジョーブ？ と可哀想な人を見る眼でこちらを見てくるクルー達に、エンクルマはため息をつかざる得なかった。

「信じる訳ないだろう。大体、先の爆発だって彼が原因だそうだしやないか」

「らしいですね。通信官が自分で自分を疑つてましたが」

ため息をつく。エンクルマも長い間、管理局で執務官として長年働いてきたが、こんなにデタラメなことに出会つたのは初めてだった。

部下はモニターに映る森と名乗る未確認生命体を観察する。見た目からは普通の青年にしか見えないのだが……

「執務官、今回の事件、俺たちが担当するのでしょうか？」

言外に関わりたくないという気持ちを滲ませ、部下は上司であるエンクルマに尋ねる。エンクルマは、先程きたばかりの通信の内容を思い出しながら答えた。

「いや、本局から直々に命令が来たのだが、今回の件はハラオウン執務官が担当するらしい」

「ハラオウンと言えば……」

「ああ。クライドの奥さんだよ」

顔を歪めながら、エンクルマは答える。最初に事件に遭遇した執務官がその事件担当になるのが普通であるのに、こうしたあからさまな事が行われるということはバックに上層部が関わっているという証拠に他ならない。

夫が死んだ事件を担当するハラオウン執務官の気持ちを思うと、彼らは遣る瀬無い気持ちになった。

「まあ、俺たちに出来る事は本局へ彼を無事送り届けることだけさ」

エンクルマはブツブツと独り言をしゃべる森を見つめながら、つぶやいた。

「彼……モリ・カクでしたか」

「はい。今は第二取調室にて取調べを受けています」

「分かったわ。ありがとう、下がっていいわよ」

彼女、リンディ・ハラオウンは部下を下がらせ、モニターに映る取調べの様子を観察する。彼女自身、今自分がどのような感情を持

って彼と接すればいいのかわからなかった。

彼女の夫であるクライドはロストログア『闇の書』を封印・輸送中に救難信号を発信。それを受信した近くの巡航艦が現場に急行する途中で謎の高エネルギー反応が検出される。

そしてその現場にいたのは、次元漂流者と自称する謎の少年が一人……

謎だらけ、というか一つも理解できることが無いとハラOWN執務官は頭を抱えていた。

どう考えてても、モリと名乗る青年が怪しいのは間違いない。高エネルギー反応も彼から検出されているらしいし。しかし、動機もなければ次元漂流者がそういきなりワケも分からず破壊をばら撒くというのも納得の行かない話だ。

通常、次元漂流者は訳も分からないまま衰弱死することが多い。本局に保護されるというのは幸運な方であろう。だから、彼には動機が全く無い。

そもそも、一巡航艦を跡形も無く破壊するという馬鹿げたことを一人で出来るとも思えない。さっき上がってきた報告書がいうには彼にリンカーコアは存在しないということだ。ますますそんなことをできるとは思えない。

けれども……、彼女は自嘲する。こんなに彼が気になるのは夫を失った悲しみや怒りのやり場に困っているからなのかもしれないわね、とリンディは思った。

「ハラOWN執務官、時間です」

彼女は無言で頷いて、彼の待つ第二取調室に向かった。

「で、あなたは何も覚えてないのね」

目の前の若々しい女性は先程のムサ苦しい男に比べて、硬い顔でこの取調室に入ってきた。正直、顔がすごく好みです。

なんか額に、点字みたいなのがあるがどうでもいい。顔が全てだ。

そんなデレデレした空気が伝わったのか、彼女は大きくため息をついて、再び同じ質問を繰り返す。

「……もう一回、あなたの覚えている限りでいいから、話してもらえる？」

「ええ。いや、本当にここに来るまでの記憶が一切思い出せなくて…… いえ、名前だけは覚えているんですけどね。爆発……ですか？ 見たことないんで、俺がここに来るまでに起こったことじゃないんでしょうか」

さっきと同じ話を繰り返す。今のモリの格好は、支給してもらった病院に入院しているような服を着ている。

「……分かったわ。あなたは他の事件で重要参考人になっているか

ら、一応、裁判に出てもらうけどそれが終われば自由よ」

彼女はそういいながら、この世界について基本的なことを書いてある絵本みたいなものを出した。無論、文字がわかるはずもない。話が普通に成り立っているこの状況にも森はひどく驚いたものだ。

「これを見て勉強しなさい。たぶん、管理局の次元漂流者枠があるから仕事には困らないと思うけど……」

何故か、彼女は自分を胡散臭げな目で見ながら説明を続けた。ありがたい、本格的に生活の心配はしなくてよさそうだ。今後の方針を教授に相談するなんてことが害悪にしかないことは、これまでの経験が証明している。

彼に相談するくらいなら、牛乳に相談したほうがまだ。というかこの体で食事をとれるのだろうか？

「あとは追って説明するわ。少し窮屈な思いをするかもしれないけれど、もう少しの我慢よ」

最後に励ましらしきことを言って彼女は席をたった。俺は手を振る。

「では、また」

「ええ、また会いましょう」

こうして、今後俺を悩ませ続けることとなるリンディ・ハラオウンとの初めての邂逅は終わった。

森が一時勾留所で、意外に快適な生活を過ごしている頃、外の世界では奈多教授は発信機をどの距離に置けばいいのか試行錯誤していた。

待機電力で発せられるエネルギーでさえ、森にとっては過ぎた力であることを知った彼はいい感じの距離を探っていた。

具体的には、色々な物がうず高く積まれた研究室でバタバタしていたのだった。

「こつやつて、もっと遠くしたほうがいいのか……？ クソッ、コードが足らねえ」

バタバタとこんな乱雑な部屋で動き回れば、結果としてホコリが舞い上がる。

鼻炎持ちである彼の鼻孔には、刺激が強すぎたようだった。

「へあ？ は、は、は、ハクション！」

隣の研究室まで聞こえそうなほどの大きな声を響かせて、彼はくしゃみをする。彼の彼たる所以はその方向がバッチシ培地方面であ

るような、驚異的な間の悪さであろう。

「……あ」

こうして、管理局史上、最悪の被害を出し、最も意外な終りを見せることになる一連の騒動が始まるのだった。

第二話 くしゃみの代償

『この宇宙はワシが創った』

モリ・カク 裁判後、インタビューに応えて一言

『第二話 くしゃみの代償』

第18管理世界 首都ハイネセン

「本当に……本当に連絡が途切れたのか……？」

「はい……！ 先ほど、第六基地から『避難せよ』との打電があった後、連絡が取れなくなりました」

「総理、これは……」

「ああ、基地は全滅、したと思った方がいいたろっな」

「そんな……」

危機管理センターには、再び重い沈黙が訪れた。

ここは第18管理世界の緊急事態に対する対策本部、首都に設置してある危機管理センターである。その名の示す通り、ここには管理世界の政府の高官、軍の高官などそうそうたるメンバーが集まっ

ている。その目的は一つ。迫りくる災厄に対していかに対応するか、それを話し合うための会議であった。しかし、その機能が十分に発揮されているとは言い難い。

その管理世界全域に迫る危機は突然現れた。勿論、前触れなどもなく、本当に突然現れたのだ。最初の被害者となった第五開発衛星に住む千五百人の開発団は何が起こったか分からないまま、この世から去らねばならなかっただろう。そして、同じことがこの管理世界の人的、経済的な中心であるハイネセンでも起ころうとしていた。つまり、この第18管理世界自体の危機であった。

そのあまりにも突発すぎる災厄に対して、こうして高官などが集まった事だけでも、その危機管理体制は褒められるべきであろう。しかし、すべてが遅すぎた。いや、その災厄が常識外であったのだ。

観測した者の報告によると、その災厄はただただ巨大な水であった。この宇宙空間で水である。

その成分を解析するなど悠長なことを言っている場合ではない。ただの水ではあるが、その質量がバカでかすぎた。この星と比べて……といったほどのふざけた質量を持つ水の塊なのである。しかもそれが群となってこの星に飛んでくるのだからたまらない。

ただの水。そう、ただの水であるがその質量に太刀打ちできるものはいなかった。頼みの綱であるアルカンシエルを撃ったところでその当たった所が少し蒸発する程度である。その災厄に一番近かった衛星はこれといった対策もなされずにその質量に飲みこまれ、粉々になっていた。文字通り、粉々になってしまったのである。その一瞬のうちに千五百名もの尊い命が失われてしまった。

「……到着まであと何分なのだ」

「えー、あと三分ほどです」

「三分、三分しかないのか……！」

ドンッ！ と机を叩く中年の男性。彼はこの管理世界政府の最高責任者であった。彼に残された手は無い。

「本当に、何も手は無いのか！？」

軍高官が怒鳴る。その怒鳴りにその質問はもううんざりと技術者は答えた。

「無理ですよ。あの水の塊を破壊出来る訳ありません。アルカンシエルでも無理です。管理局の部隊全てでアルカンシエルをぶっ放してもその質量の一部も蒸発出来ないでしょう」

「……もう、無理なのか……」

力なくうなだれる高官。彼にはミッドチルダに家族たちがいた。彼らが助かる保証は無いが……少なくとも数日の間、彼らには逃げるための時間が残されている。その間に逃げることを彼は祈ることにできなかった。

彼らはその危機が迫っていることをテレビやラジオで国民に伝えることはしなかった。無用の混乱を招く事になると考えたからだ。人生最後の日を人々とその逃亡手段を醜く争って終わるなんてことにはしたくなかった。どうせ、伝えたところで逃げることなど出来ないのだ。それなら一瞬のうちに、気づかぬ間に滅亡した方がよい。

「で、各管理世界に連絡は……」

「はい。今もデータを送り続けています。この世界が終わるまで、データは送られると思います」

「そうか……他の世界の人達が避難出来ればいいのだが……」

呟く首相。その言葉に、ある軍高官は問い尋ねた。

「しかし首相、……どこに逃げればいいので？」

三分後、ミッドチルダ中央レーダー分隊に絶え間なく送られ続けていたデータが途切れることとなる。

「なんですって!？」

リンディ・ハラOWNはとんでもない報告を受けていた。何でもリーダー分隊が第18管理世界からSOS信号を受信、その後しばらくしてその救難信号は途絶え、ある事象のデータのみが送られ続けることとなった。そのデータが解析されるにつれ、恐るべき事が分かった。つまり、巨大な、あまりにも巨大な水の塊がこの宇宙空間を飛んできたというのである。その推定される質量は、文字通り天文的な数と言ってよく、おおよそ人間にどうにか出来る物ではなかった。勿論、魔法というファンタジーを使ってもである。

この事はすぐに管理局全体に知れ渡ることとなった。最初はそのあまりにもふざけた、理不尽な事態に信じない者もいたが、第18世界からの通信が途絶えると、その危機を認識せざる得なかった。第18管理世界に住む、何数十億もの人間が死んだことを意味したからだ。勿論、生存者はいることはいさるだろうが、救難に行くことも叶わなかった。なぜならその災厄は現在もその軌道上にある数々の世界を飲み込んでこのミッドチルダにも迫って来ていたからだ。とても救難などに行く余裕があるはずがなかった。

タイムリミットは一日半。その間にこの都市に住む住民を避難させることなど無理だ。だからと言って、その災厄をどうにかできるという妙案もないことは明白であった。それにしても時間がない。次々に入る管理局への救難信号も黙殺するしかなかった。

「ですから、提督は会議にご出席ください。何よりもこの問題は時間との戦いです」

職員が顔を青ざめながら言う。当然だろう。もし避難となれば彼のような一般人は取り残される可能性が高い。つまり、死を意味する。

「分かったわ。その会議室はどこ？」

緊張感漂う会話を交わしながら、目的地に行こうとしているリンディを呼び留めたのは、先から面白そうな顔を隠そうとしない、自称次元漂流者、森であった。

森自身、急に騒がしくなったこの状況が掴めずにいた。いきなり何か連絡を通信によって受け取ったかと思うと、この部屋にいる職員が突然騒がしくなったのだ。何が起こったのか？ このどこか他人事のようにふるまう青年に教えてあげる様な親切な職員はここには誰もいなかった。誰もが精一杯だったともいえる。

そして森は空気が読めない奴だった。いや、空気は読めるが、好奇心が勝ったのだらう。声をかければ嫌な顔をするであらうリンディに彼は声をかけた。

「リンディさん、一体何が起こったんです？」

明らかに嫌そうな顔をしたリンディは、その顔を取り繕うともせずにこちらの質問を無視しようと歩を進めた。それを追って、横から執拗に聞き出そうとする森。周りに他の職員が居るのにわざわざリンディに付纏う森は、勿論嫌がらせも多分に入っていたと思われる。

「リンディさん！ おしえてーくださいよー」

「ああもう！」

その長い綺麗な髪を、がりがりとかきむしって、リンディは森の

顔を睨めつける。その顔は、お前うざいからどっかいけと、誰にも分かるほど明確に語っていたが、森にはそんなのは関係なく、期待した目でこちらを見つめるだけであった。

その顔に、はあと溜息をつき、リンディは仕方がなしに今、起こっていることを教えた。つまり、この星の危機であると断言したのに森の顔はさしたる変化を見せなかった。

「なるほど……　ちなみにここからどっちに方面なんですか？　その水の塊ってやつは？」

空を指す森にそんなこと、そこらへんのオペレーターに聞きなさい！　と怒鳴ってからリンディは会議室へと向かった。そして、その会議室で、リンディはまたもや、あのいけすかない次元漂流者の名を聞くことになる。

リンディに振り切られてから、森は近くのオペレーターにどの方面から水の塊が来るのか尋ねることにした。森は、幸いにもオペレーターに大体の方向を教えてもらった。結果的にこのオペレーターがめんどくさいと思わずに、この一見ふざけた質問に真剣に応えたことが人類を救うこととなる。

「ありがとうございました！」

先ほどのリンディとは打って変わって、真面目に方向を教えてもらった森は礼を言って、この喧騒に包まれた司令室を後にした。

「さて、教授、聞こえていますか！」

『ああ、大丈夫だ、聞こえてる』

頭に響く声に顔をしかめながら、森は先の事件について聞いたです。その件に関して、教授は、

『ごめん、くしゃみしちゃった えへっ』

と頭が腐ったような答えを森に返した。森もそこらへんはすでに慣れているので、何もなかったのようにエネルギー送信機のネジを回す事を教授に頼む。

『どれぐらいがいいのかね』

「そうですね…… 一目盛りじゃなんか不足っぽいですし、五目盛りぐらいまわしてください」

『合点、承知！』

このやり取りの後、森は建物から外に出た。この緊急事態、ただの次元漂流者一人が外に出たところで、何ら特に言われることはなかった。

「あそこらへんか……？ えーと、行くぞー」

指の具合を確かめ、掌を先ほど教えてもらった方向に合わせる。
右の手首を左手で固定し、空のある一点を狙う。

「あたれ———！」

『ビュン……！』

「ん、なんだ……！？ おい！ あの水の塊の反応が消えてるぞ！」

「そんなはずが……！ 本当だ、消えてる、消えてるぞ！」

驚きに動揺が隠せない司令室のオペレーター達。何度も計器の故障かと確認するもあの災厄という他ない水の塊たちはすべて蒸発していたのだ！

徐々にその事が分かるにつれ、部屋は喜びの声で包まれる。やった！ これで俺達は生き残る事が出来る！ 人生はまだまだ続いて行くんだ……！

しかし、その喜びもそう続かない。

「おい、第19管理世界からの連絡はまだか……！」

「27も応答がないぞ……」

「まさか、第38管理世界はどうだ！？ あそこには俺の家族が住んでんだ！」

「反応……ありません……！」

次々と寄せられる驚愕の声、連絡をたった管理世界の数は十三にも上った。

その後、森は管理局の執務官に逮捕されることとなる。

罪状は『銀河消滅及び惑星間戦争における大量殺人の罪』 管理局史上でも、この罪状が適応された最初にして最後の例となった。

テレビには、裁判所の中が映る。テレビ中継は管理世界全域に放送されることになる。興奮気味のリポーターがその裁判所周りの様子を詳細にレポしていた。

「ごらんください！ この裁判所の周りを囲む市民団体の数を！まさに人の海です！ モリ被告が滅ぼした管理世界の数は、13！人数にして167億人にも達します！ この人類史上まれにみる大殺戮に対して、ミッドチルダ上級裁判所はどのような判断を下すのでしょうか？！」

『大殺戮者のモリを許すな！』 『悪魔に死刑を！』

プラカードを下げながら、裁判所周りを行進するのは家族や友人が消えた管理世界に居た人達である。滅んだ管理世界の人間と何らかの関係がある人は、全管理世界人口の約半数にも上るとの試算もあった。

今回の裁判の傍聴希望者はかなりの数にのぼり、その傍聴券はプレミヤがつくほどであった。それほどの人気があったのだ。

後に、法曹界でも最大の事件の一つに数えられる裁判が始まつのである。

第三話 取引

『宇宙背景放射？ ああ、やっぱりあの機械からの電波ってこっちでも観測できるのか……』

モリ・カク ミッドチルダ観測台で呟いて一言

『第三話 取引』

裁判所は外とは違って重い沈黙に包まれていた。それもそのはずで、今回のオークションにでた傍聴券は憎き犯人であるモリ・カクを見ようと、遺族たちが買い占めていたからである。

遠くで鳴り響く祭りの様な喧騒。それは裁判所の周りを行進する市民団体のシュプレコールであった。その低く響く声は、まさに呪詛の声である。

開廷の時刻となると、裁判長、検事、弁護人が入廷してきた。裁判長は無表情、検事はこれから始まる世紀の裁判に自分が関わることに興奮を隠せない様であった。対照的に、顔が面白い様に青白いのは弁護人である。事件後、対個人テロ組織が出来るとの恨みを買っている森の弁護をすることは、文字通り命をかけることと同義であつたからだ。

裁判所がざわざわとする。

「被告人、入廷」

との声に、奥から世紀の大犯罪者、モリ・カクが入ってくる。好奇心、憎々しげな視線などに晒された森はやはりどこか他人事のよきな態度を崩していなかった。態度は自然体、むしろ憎いと睨めつけるこちらが間違ってるのでは？　なんて事まで思ってしまうほどの自然さであった。

「では、まずは被告人。氏名・年齢・職業・住居・本籍を」

裁判官が裁判所の中央に位置する被告席に向かって言う。森は素直にその質問に答えた。

「森恪、年齢は22歳です。職業は、無職。住居は不定です。本籍は……」

考え込む森。そう言えば、本籍はどこだろう。というか自分が次元漂流者だと知っての質問なんだろうか？

「本籍は、まあ、無しで」

ピクッと裁判長のほが引くつくが、森が気にした様子はない。弁護人の額から汗が、たらりと一筋流れた。

「わ、分かりました。検察、起訴状を読み上げてください」

「はい、わかりました」

検察の若い男が前に進み出る。その手には厚い起訴状が握られていた。

「被告、モリ・カクは新暦54年先月五日、午前11時五分ごろ、中央第二司令所近辺から第18管理世界方向にビームらしきものを発射。その結果、第38管理世界を含む13もの管理世界を重大なる危機に陥れ、約167億人もの尊い命が失われました。その罪は重いと言わざるを得ません」

読み上げる検察官に同調するように、傍聴人たちが頷く。

「この行為は多くの法律に違反すると思われますが、その規模の大きさなどを鑑みて『銀河消滅及び惑星間戦争における大量殺人の罪』に問いたいと思います！」

言い切った検察官は、静かにもとの席に戻る。裁判長はそれを見て頷き、被告に語りかける。

「被告人には黙秘権があります。ですから、自分に不利な証言はしなくても罪には問われません」

頷いた森を見て、続けて裁判長は被告人の陳述へと進める。

「モリ被告、今回の事件について何か言いたいことがあれば言っているんですよ」

それを聞いた森は静かに語り出した。

「私は無罪とかそういう物を主張はしません」

森は静かに、裁判長の目を真正面から見て言う。それはそうだ、やってないとは言えないだろう、証言や証拠は有り余るほどある。今回の裁判の焦点はただ一つ。あの突如宇宙空間に現れた水の大群、あれを回避しようとして結果こうなってしまったという場合、その行為は罪に問えるか、という事だった。

確かに正当防衛とも言えなくもない状況であるし、もし森が何もしなければ人類が滅亡していた可能性すらある訳である。そう言う意味では森は英雄といっても間違いではない。

だがしかし、167億人の命を奪ったことも事実である。そこが焦点になるであろうというのがこの裁判の下馬評であった。

しかし、森はその予想を上斜めに行く反論を展開したのであった。

「皆さん、何故人を殺してはいけないか？ 考えたことがありますか？」

森のその言葉は、テレビ中継によって全管理世界のお茶の間に流された。この前例のない、裁判の実況中継は史上最高の視聴率を叩き出すこととなる。

「それは、どういうことかな？」

裁判長が困惑した顔で問う。何故人を殺してはいけないか？ 当たり前だと思っていた事に、敢えてほじくり返す森の意図が彼は分からなかった。

「それは、道徳的な事を抜けば法律に違反するからですね」

検察が口をはさむ。その答えに森は満足げに頷いた。

「そうです。もしある人がどうしても殺人をしたいとする、その時、彼が殺人をすることによって受けるデメリット、まあ裁判を受けないといけないとか、就職が困難になるとかですね、そういったものと殺人によって得られるメリットを比べた時、もしメリットの方が勝った場合、彼に殺人を止めさせることは出来ないでしょう」

その詭弁のような話に検察が反論しようとする、それを裁判長が手で遮るようにして止める。とりあえず、彼の言い分を聞いてみる、そういうことらしい。

「そして今回の場合ですが、私に法律をあてはめようとする事が間違ってます。つまり、法律云々に関するデメリットがゼロです」

すんなりと、とんでもない事を言う森。

「な、どういうことだ、それは!？」

検察が狼狽する。それを見た森はにやりと、それは見る物が見れば悪魔のようだと評すほどの悪人顔で口をゆがめた。

「いや、だから法律は『人間』に対してに物でしょう？ 私は『人間』ではありませんから」

まさかの人外宣言。すると当然持ちあがってくる質問がある。

「では君は何だね？　まさかデバイスなんて言ったりするのではないだろうね？」

魔法世界では、人以外のものも裁判で裁けるか？　これが近代法学で活発に議論されている問題でもあった。

「いいえ、私は神です」

静まりかえる裁判所。あいつ、頭大丈夫かとこそそと話される中、検事はこれが弁護人と共謀して精神異常を偽装しようとしているのではないかと弁護士を睨めつけた。が、その弁護士はただあたふたしているのみである、どうも事前の協議の結果ではないようであった。

「実際の神の定義はともかく、自分が神のような力を持っていることは皆さん知っているでしょう？　なんせこの世界、一瞬ですべてを滅ぼす力を持っている訳ですし」

青ざめる裁判長。同じく傍聴していた人々も青ざめた顔をしていた。これを聞いているテレビの前の人間も顔を青くさせているはずである。それはそうだ、彼が言わんとしていることは……

「もし私を罪に問おうというなら、この世界を全て破壊します」

この時、森は全世界を人質に取ったのだ。

そして、森のターンはまだ終わらない。

「まあ、せっかく出来たこの世界ですし、私も壊したくないんですよ、やっぱり。ただ私は観察がしたいだけです」

あげて落とす。ヤクザの手口だった。

「それと、そうですね…… 私は体制側に味方したいと思います。ここでは管理局ってことですかね？」

もう森の独壇場であった。

「管理局のお偉い方、聞いてますか？ 私を雇ってもらえませんか？ そうすれば反抗的な世界なんて一発ですよ」

右手を空に向けて、ビュンと口で音を出す。どこまでも、どこまでも彼の行動は軽かった。言い終えた森はいい顔で被告席に座る。

「い、一旦、裁判を中断します」

裁判長が慌てながら、やっとのことでそれだけを言う。ざわめく法廷の中、去ろうとする森に声を掛ける一人の女性。担当執務官でもないのに、傍聴席にいたリンディ・ハラオウンであった。

「モリ・カク！ あなたががエスティアを……、クライドを殺した

の?!」

泣き声と怒声の混じったような声、その必死な声に、森は振り返りつつ歩きながら、何でもないように言い放った。

「……あなたは今まで踏みつぶしたアリを覚えています?」

リンディは茫然と、森が去っていくのを見つめるしか出来なかった。

森は裁判が中断された後、何故か管理局の最奥へと連れて行かれた。おかしい、裁判の途中であるはずなのだが……

『いやあ、森君のあの口上! 痺れたね!』

「適当に思いついたこと出まかせにしゃべっただけですけどね」

暗い通路を森と秘書だという女性、二人っきりで歩く。先ほどまでは、厳戒すぎるほどの警備が張っていたというのに、この差は一体なんだろうか? そして自分はどこに連れていかれているのだろう

う？

まあいざとなれば上にビームを撃てばいい、そうすれば外までの通路は確保できるだろう。とか考えていると、秘書がある扉の前で足をとめた。この通路に入ってから誰とも会わなかったが、そんな所にだれがいるのであろうか？

ラスボスチックな扉から入るように秘書に促された森は恐る恐るその扉を開ける。中には、なんだかよく分からないポットの中に浮かぶ脳みそがあった。しかも三体。地下深くに浮かぶ三体の脳みそ……どう考えても悪役、黒幕であった。

な事を考える森も今では全世界を人質に取る、大悪党である。脳みそも森にだけは言われたくないであろう。

その燐光に照らされた、ある意味では幻想的とも言えなくもない脳みその前に森は進みでる。立つとどこからともなく機械音声が届いてきた。

「君が……モリ・カクかね？」

「はい。まあそうです。えーと、あなた方は……人間？」

そのともすれば失礼とも言えなくもない疑問を見事にスルーして、機械音声は森に質問を浴びせかけた。

「君はこの世界を滅ぼす、と言っていたそうだが、そうなるどころからとしては困るのだがね」

「いえ、私もこの世界を破壊したくありません。観察、したいだけだったんですがねえ？」

どうしてこうなったんだろう。考えるとコンマ一秒で答えにたどり着いた。

『……呼んだ?』

うつせ、黙つとけ。

「ともかく私はこの世界の事をもっと知りたい、それだけです。だから管理局に協力、することも各かではありません」

「ふうむ……」

脳みそ、もとい管理局側からしてみても彼の協力はありがたいことであった。彼のチカラは抑止力としてはこれ以上のものがないと言ってもよいほどのものであるし、協力してもらえらるならそれはありがたい。

しかし、その『世界』を破壊出来るほどのチカラを個人に任せておくのはどうだろうか、どう考えても不味いだろう。

だからと言ってどうすることも出来ないのであるが。

「よし、分かった。君を管理局は歓迎する」

「ありがとうございます。出来れば、私が調べたいと思った物を自由に調べたり知ったり出来る権限も欲しいですね」

「よかるう。その代わり……」

「分かってます。あなた方の要請には出来る限り従いますよ。それに破壊した世界が13になろうが14になろうが、そう変わらませ

んしね」

こうして『管理局の最終兵器』『史上最強のメッセンジャー』と後に呼ばれる、管理局最高評議会付属連絡分室が誕生したのであった。

なお裁判は、最高評議会が手をまわして見事無罪を勝ち取ることとなる。また、その後のマスメディアによる情報操作（印象操作とも言う）によってモリは『世界の危機を救った英雄』と認知されることとなる。

「はあ、転属ですか」

ビアンテ・ロゼは何故ここに呼ばれたのかすら検討もつかなかった。

転生してからもう13年、最初は戸惑うこともあったが、これど

このオリ主？　と言わんばかりの恵まれた素質によってトントン拍子に出世し、花形の戦技教導隊で活躍している現状に不満は無かった。ありようがない、何せ総合SSランクの才能、交際の申し入れが後を絶たないその美貌。もう、人生の勝ち組と言ってもいいほどである。

原作どうしよーかなー、まあ、始まる頃にはもう24だしなー、なんて軽く考えていた彼女の悩み事と言えば、最近起きたモリとかいう奴の事件ぐらいであってそれも解決したようだしと軽く考えていた。

そんな彼女が本部に呼ばれたわけである。また出世かとほほを緩ませて仕方がないだろう。

「そうだ」

目の前の隊長は苦しそうにうめき声を上げる。彼女は、いつも見る凜々しい隊長とのギャップに嫌な予感を感じていた。

「出向、ではないんですよね？」

「ああ。行き先は……」

口ごもる隊長。なんだ、そんなに言いたくないことなのか。この完璧オリ主様が行く所だ、凄い所に違いない。

「何ですか、ハッキリしてくださいよ、隊長」

「……ああ、そうだな。本日付けで、ビアンテ・ロゼ二等空尉は管理局最高評議会付属連絡分室に転属となる」

「は？ どこですか、そこ」

あまりにも予想外の返事を聞いて、軍隊では許されないような返答をしてしまうビアンテ。その驚くビアンテに、管理局に入ってから色々と面倒を見てきた隊長は苦笑してしまう。

「ああ。新設される分室らしい。わざわざ君をご指名だよ」

「はあ」

この時、彼女はこの転属が彼女の人生を大きく歪めることとなるのを知らなかった。

第四話 間奏

『神だつてサイコロを振るし、麻雀も好きさ』

モリ・カク 週刊ミッドチルダのコラムに寄稿
ちなみに好きな役は『タンヤオ』とのこと

『第四話 間奏』

最近、管理局内では色々な種類の『怪談』が流行っているらしい。そんな噂をキムラ・クニオ二等陸士が初めて耳にしたのは、入隊直後に新人たちを待ちつける洗礼、いわゆる『可愛がり』が一段落した頃であつた。

訓練学校から出た後、直でそのまま任官したキムラは他の同窓らとほとんど何も変わらない進路をたどるだろうとみんな思っていたし、キムラ本人もそう思っていた。

彼の人生がねじ曲がり始めた直接の原因、未来で彼が散々怨むことになるであろうその出来ごとはいつもの日常生活のほんの一部分でしかないはずあつた。

「な、なるほど、この要望書を届けておけばいいんですね？」

やっとこの武装隊生活に慣れてきたキムラ陸士は、目の前の体格のいい大男の圧倒的な存在感に気押されそうになりながらもやつのことで、『お使い』の内容を確認していた。

「おう。その分隊から借りたい奴が居るんだよ。そいつは別の組織に所属しているから、それに関しての承諾書をもらっとかないといけないんだ」

全くめんどくさくなったもんだげと、最近の部隊処理の複雑さを嘆く武装隊隊長は、その大きな図体を窮屈そうに作業机に詰め込んでいた。

その大柄な体故に、進む圧倒的なプレッシャーはその窮屈な机にも抑えることは出来ない様で、新人たちはこの部隊長の前では必ず縮こまってしまふのであった。

「分かりましたけど……」

渡された茶封筒に、形だけの封印とぞんざいな姿を胡散臭そうに眺めていると、キムラは妙な事に気付いた。おかしい、この書類の宛先が聞いたこともないような部署であったからだ。

『管理局最高評議会付属連絡分室』

その後、いやいやながらも彼がかなり濃いお付き合いをすることになる場所との初対面は、こうして地味な形で行われた。

「管理局最高評議会付属、連絡分室？ 聞いたことはありませんが……」

その名前からするとその最高評議会、というところの下部組織の様だがそれすらもキムラ自身は知らなかった。平隊員の彼が知らなくてもおかしくなかったのだが、もし自分の組織の成り立ちに興味がある隊員であれば常識であつたかもしれない。

そのまだ青い声に苦笑しながら、隊長はまだ『お使い』に駆り出されていることに不満なのである。キムラの心を気遣つてフォローをいれる事にした。

「まあまあ、そんなにむくれるなよ。たまたま空いてたのがお前だけだったからだってーの。それに、ほれ、使いで会つてから気に入られて、そのまま秘書に抜擢されるかもしれないじゃないか、な？」

「いえいえ、そのお使いが嫌だつて思つてるんじゃないですよ。ただ……」

その茶色いただの封筒を見つめながら、キムラは呟いた。

「どうも嫌な予感がするんですね……」

「ここ……か？ 薄暗くて本当に人が居るかどうかもあやしそうだ

けど……」

入口の地図を見てそれに沿ってきたと思うのだが、だんだんと奥に入るにつれ自信がなくなってくる。通院している時、検査室に行く間の通路が妙に薄暗くて通っていいのか戸惑ってしまうような、そんな感じである。

そしてやっとのことで埃を被った案内図を見つけ、右奥……へとどんどん奥に進んでいった。

薄暗い廊下の角を曲がったどん詰り。埃っぽい空気が、中庭を見れるように作られた窓を通して入る太陽光によって強調される。何故か暑いと思ったら、日が照ることによって黒いカーテンが熱つされるのが原因みたいである。

昼下がりの図書館みたいだな……、一年ほど前の訓練校の懐かしい記憶を懐かしく思いながらその生ぬるい取っ手を回す。

「おお、これはまた久しぶりのお客さんだね」

開いた扉の先には、くたびれた感じの初老の男性がカウンター席の奥に座っていた。

「は、はあ」

事態が飲み込めず気の抜けた返事を返すキムラ。そんな呆けた態度のキムラを気にもせず初老の男性は読みかけの小説に筆をかませて閉じる。椅子を引いてキムラの正面に座りなおすと慣れたように用件を聞き出した。

「で？ この無限書庫司書室に何の用だい？」

「無限書庫？　ここは連絡分室があると聞いて来たんですけど」

しかし、その書庫という言葉聞いてなるほどと思う。確かにこの部屋にある本棚の本は資料というより本である。それにこの部屋近辺に漂う古臭い空気は確かに図書館のそれであった。

キムラの質問に、ああまたかと得心した様子で頷く男性に戸惑いながらも用事は分かってもらったようでキムラはそのまま静かに男性の返事をまっていた。

「しかし……彼らに何の用なんだい？　彼これ一か月はあそこに用事なんか来なかったけどねえ？」

奥にメモを探しながら飛んできた彼の質問に、キムラは戸惑った様子で答える。

「え？　いや、うちの隊長が彼らに力を貸してほしいらしくて」

「何？」

少し鋭い声が出た。先の男性とは雰囲気が違うようで、この春の入隊以来大きな声にビビリ気味なキムラは内心きょとりながら上ずった声を出すことしかできなかった。

「な、何ですか！？」

「あ……、いや、なんでもないよ」

口ごもるキムラに変な顔をしながらも、見つけたメモを手にながら男性はカウンターに戻った。メモを出しながら男性はキムラに説明する。

「まず、その階段を下りて右の奥から三番目の本棚を曲がってそのまま最後まで突き進んでください。すると、赤い本がど真ん中に奥に本棚があるのでその前で目をつぶって……」

「いやいやいやいや……」

首を振るキムラを不思議そうな顔で見る男性。え？ おかしいのは自分なのか？ 何だそのゲームのクリア条件みたいなミッションは！？

「おかしいじゃないですか！？ なんでそんな所に、オフィス作ってるんですか！？」

事務職と言い難い武装隊の隊員であるキムラでさえ、もつと現代的な空間に住んでいた。魔法といっても高度化した科学なのである。そんなファンタジックな空間で生活や仕事をする必要もない。

「いや、理由とか聞かれましたも……」

迷惑そうな顔をする男性。

はっ！ と気がつくキムラ。

目の前の男性の顔は、本当に迷惑そうな顔をしている。

いや、ちょっと待てキムラ。なんかこっちが悪いみたいな空気だぞ……

漂う微妙な空気。ちょっと変にテンションが高かった過去の自分に後悔しながらも、その続きを、無言で促すキムラはある意味度胸なしであった。

「……そこで心の中で三回呟きます。『モリに会いたい』……これを三回繰り返すんです」

「……はい」

もう何も言うまい。説明後、地図代わりのメモをもらったキムラはそばの湿っぽい空気漂う階段を恐る恐る降りて行った。

妙に甘ったるい湿った空気が鼻につく。午後の図書館の匂いを思い出しながら階段を下りると目の前に巨大な本棚が現れた。その天井は高さ二メートル弱といった感じで高い訳ではなく、どちらかというと低い部類に入るだろう。

そして壁のように一定間隔順に生えている本棚はそのまま天井にまで達している。そんな光景が先が霞むほど遠くまで続いている。ここがロストログアであるというのも納得できる話だ。

通路も肩幅二人分ほどで比較的窮屈である。その周りを天井までつながる大きな本棚が囲んでいるのであるから圧迫感は想像よりも強烈だった。

なるほど、こんな場所であれば地図も必要だよな。

先ほど地図が手渡された時は変な気持ちもしたが、こうも広大な図書館というのならしょうがないのかもしれない。キムラは次々と常識を覆していく魔法世界の不思議に感心していた。

ある程度、地図を頼りに進むと、目的の場所に着いた。真正面には中央に赤い本がさしてある本棚がある。眉つばものだと思いがら、言われた通り心の中であの言葉を三回繰り返した。

唱えてしばらく経った後、何も音がしないので失敗かと疑いながらゆっくりと瞼を開ける。すると、先ほどキムラが見ていた光景とは違う何かが目の前に存在していた。何故かそこに鎮座していたのは、巨大な本棚ではなくこじやれた西洋風の扉なのである。

なにかチーズとかヨーグルトとか売ってそうな店の扉。分かりにくい例えかもしれないが、そうとしか感じられないのだからしょうがない。

そんなこじやれた扉が突然、現れたのだからその前に突っ立っていたキムラは驚きを隠せずにいた。驚きすぎて声を失っている、啞然としている、そんな様子である。

その扉には不器用な文字で『管理局最高評議会付属連絡分室』と書いてある看板が下がっていた。

彼はこの時、目的の場所にたどり着いたことを確信したのだった。

扉を開けると、中には緩やかな生活感漂う部屋がそこには存在していた。

中央には大きな部屋にしては小さめの机。いや、その机でさえ四、五人は十分に囲んで食事もできるであろうほどの大きさなのであるが、ただこの部屋が大きすぎた。そしてその机の上には食べた後の食器がそのまま残されている。

奥の方には何かパチパチと火のはぜる様な音がする。どうやら暖炉のようであろう。

……ここが職場なのか？

もう誤って私室に入り込んでしまったと考える方が現実的なんじゃないかと思いはじめキムラであるが奥にどうやら人の気配がある。

もう、こうなればその人に聞いてみるしかないだろう。

そう思い直したキムラはその奥に近づく。そこには、タオルをアイマスクの様に掛けてソファーに寝転ぶ男が一人。ひげが生えているから老けて見えるが、24、5歳ぐらいだろうか。寝ているところを起こすのは気が引けたが、こうなればそうも言ってられない。その気持ちよさそうに上下する体をゆすって、彼を起こすことにした。

ゆするとすぐにむくりと体を起こす男。そのままキムラの声が聞こえていないかのように奥に引っ込んでしまった。奥で顔を洗う音そして不機嫌そうな顔で出てきたあと「用件は？」と低い声で、ぼーとしていたキムラに質問をぶつけた。

「え、はい！ この書類を室長にへと」

キムラは、目の前のだらしない男がモリ・カク室長であると推測していた。名札をちらりと見たときの名札を記憶していたのだ。

「ほー、ふむふむ。おお、33世界のアレがねえ……」

キムラは彼の呟いている内容はてんで分からなかったが、とりあえず要望書を渡すその任務は達成できたと安心していった。

「キムラ……？」

「二等陸士です、室長」

階級章を見せるキムラに、頷くモリはどこか嬉しそうな様子である。先ほどの不機嫌さが嘘の様な変わりりっぷりであった。

「キムラ陸士、了解、あそこなら大丈夫でしょう。OK、OK、もうすぐピアノテ君が来るから、そうしたら直ぐに了解の返事を出そうと思う。だから少し待っていてくれ」

「了解です」

キムラはにこやかな顔のモリ室長の態度に、少し不気味なものを感じていたがうながされるまま奥の見た感じ上品そうなお客様用のイスに座らされた。

「はい、どうぞ」

居たたまれない空気に落ち着かないキムラであつたが、声をかけられ出された紅茶を飲んで一息つく。落ち着く味の紅茶だつた。

「最近、紅茶に嵌つててね。どう？」

アールグレイだとか茶葉の種類にまで及びそうになるうんちく話がこのままつづいちゃかなわんと、キムラは突っかけて答えた。

「あ、はい！　おいしいです！」

「そうか、そうだと嬉しいね」

微笑むモリ。

……あれ、さっきまで感じていた違和感は何だつたんだろう？
この人、普通にいい人そうじゃないか？

ボーとした頭で、心地よいティータイムを楽しむ二人。十五分ほどたっただろうか、キムラとモリが世間話に花を咲かせていると、扉の前の通路からドスンドスンという不気味な重低音が聞こえてきた。

その怪獣の足音の様な音は扉の目の前で止まった。バンという爆発音とともに開いた扉の先に見えたのは、少女の様なシウルエツト。腕を組んで、いかにも私不機嫌ですというような雰囲気醸し出す少女からは、似合わないプレッシャーが若干過敏気味のキムラには感じられた。

「今度は、室長！　また思いつきですか！？」

ぜいぜいと息を乱しながらも叫ぶ少女。彼女の名前はビアンテ・

口ゼ、転属してかれこれ数年経つと彼女に対しての管理局側の認識は『モリの秘書』的な位置づけになっていた。

「いや、今回はちがうよ」

「今回っ、……って」

「33世界のアレだよ」

「……うえー、あれですか」

苦い物を食べた時の様に眉毛をしかめながら、舌を出して遺憾の意を示す彼女からは少女特有のかわいらしさが、ほのかではあるが感じられるのだった。頷くモリはキムラが持ってきた書類をピアノテの前に差し出す。

「？ ああ、要請ですね。いいですよ、処理しておきます」

有能なキャリアウーマンの様な、できる女の雰囲気を感じながら書類をテキパキと処理するピアノテを眩しそうに見つめるキムラ。モリはキムラのそのような様子を、目を細めながらにやにやと見つめていた。

ふと何か心に引つかかる様な感じをキムラは覚える。そういえば、何か気にかかったような……

「そう……そうですよ！ モリさん！ ここはどうなってるとんですか！？」

その時間にして半刻ほど遅れたツツコミに、モリは呆れた様な顔を浮かべる。

「今更だね、君…… まあいいや、ここはロストログア『無限書庫』の中だから不思議な事があっても、それは不思議じゃないのさ」

「なんだ、ロストログアの中だったんですね。それじゃあ仕方がない」

「いやいや、モリさんが力づくで無限書庫をおどしたんじゃないですか」

ないと、書類を処理しながらビアンテがツツコミを入れる。それはビアンテはまだ着任してすぐの頃、この森という規格外の男に慣れていない頃の話であった。

数年ほど時は遡る。それはモリとビアンテが初めて会った頃の出来事であった。

「落ち着く場所がいいな」

「はあ。そうかもしれませんね」

着任早々からゴタゴタがあったモリとビアンテの分室コンビはこの暫定的に分室の会議所となった地下深くの部屋で身を縮こませ話合っていた。

ここは最高評議会から用意してもらった部屋である。管理局だっ
ていつまでも遊ばせておける部屋など無い訳で、結局彼らに与えら

れたのはこんなに、光の届かないような暗く寒々とした部屋だったのである。

「もっと勉強を静かに出来る所がいいんだが……」

考え込むモリを胡散臭げに見るビアンテ。お互いの第一印象が最悪だったのがもっともたる原因であった。彼の口から彼女の氣に入りそうなアイディアが出てくるとは思えなかった。

「まずはこの世界の文字から攻めたいから…… かといって学校に神が通うっていうのもなあ……」

しばらく考え込んでいた様子のモリだったが、突然立ち上がりポンッと掌を叩いた。

「なるほど。図書館なんてものがあれば勉強も資料検索も簡単そうだ！ ビアンテ君、資料室とかそういう関係の所はこの管理局にあったかな？」

へらへらと笑うビアンテの上官は最近、任官したらしい。とかいきなりこの部署を与えられるという手厚い待遇だ。しかも階級は少将。正直言っており得ない話である。まだ立ち入った話は聞いていないが、この長年培ってきた鼻が何かヤバい話だろうと警告を発している。

それはこの事からも推測できる。この管理局を地図なしでは移動出来ない男がこの位置にいるのはおかしいに決まってる。ヤバい話があるはずだ。

「そうですね…… 資料部もあるにはあると思いますが、図書館、では無いですねえ…… あ！ そういえば……」

何か最近聞いたことがある話が頭をかすめる。それはただのくだらない都市伝説の類ではあったがどうしてか彼の興味を引いてしまったらしい。

「噂話ですけど……経理とかでよほどヘマをした局員が流される部署があるらしいんですよ」

「なるほど……それで？」

今の話と図書館とは何の関係があるのだろうか？

「いえ、話のキモはその部署がロストロギア『無限書庫』の司書だつて言うところなんです」

「む、無限書庫……！………すげえいい！響きがいい！ぴったりじゃないか！」

「え、ええ……そこぐらいかなと。………ちょっと！どこ行くんです！」

モリは先の話聞いて、急に立ち上がったと思えばいそいそと荷物をもとめだす。その姿を見たビアンテはなんだなんだと声を張り上げた。

「思い立ったら吉日だよ！さあ、いこう！そうさ、部室を乗っ取るのは、昔から文学系の所からだってというのが相場つてもんだ！」

「部室じゃないですよ！そんなライトノベルみたいなノリで職場を荒らさないでください！」

あなた以外の局員は、たぶん真面目に働いてるんですよ！ との声をバツクにモリは会議室を飛び出した。それを追いつこうとビアンテも出かける支度をする。

行きついた場所は、まさしく陸の孤島といった表現が適切なような場所だった。人の気配は全くない。

扉を開けて、のんきに入るモリと子猫のようにびくびくとおっかなびつくりな様子で進むビアンテ。二人の対照的な様子は、両者の性格の大きな相違を表しているようであった。

昼寝しているだろう職員を一瞥したモリはそのままゆっくりと本棚の方に向けて右手をかざす。

嫌な予感がするビアンテを余所に、目をつぶってカッコつけるモリは彼女に聞こえるように声をかけた。

「昔の日本の江戸時代を知っているかい？ ビアンテ君」

「あ、はい。知ってますけど（なんで地球の日本？ そして江戸時代？）」

「その時代では、職人たちがその腕を競い、磨き合っていたんだ。例えば、人形。」

「人形？ ですか？」

「ああ。からくり人形と言ってね。人間と同じことをさせる機械さ。それは西洋のオートマタと呼ばれる類似のそれとは全然違う点が一

つある」

「違う、点……」

「西洋は人形を人間のしぐさをまねすることに特化したのさ」

「？ それのどこが江戸の職人たちとは違うっていうんですか」

「実は百八十度違う話なんだよ。彼ら日本のからくり人形は人間のしぐさに似ても似つかない角角した動きになっている。これは似せれなかった訳じゃない、似せなかったと言われてるんだよ。

つまり昔から日本は人形を人間と同一視する風潮があったのさ。だからこそ……」

「ごくりと喉が鳴る。唾を飲み込んで、ピアノ力はモリの答えをゆつくりと待った。

「つまり、あまりにも人形が人間に似すぎると……」

「……怖い、と日本の職人たちは思ってしまったわけさ。それに対して、西洋はそう言った感情が薄い。だからこうやって方向性の差が出るんだよ」

「なるほどですねー、ってこれがどういう風にこの無限書庫に係してくるって言うんですか!？」

「つまり言いたいことは一つ」

右手を挙げるモリ。

「昔から物には何か宿ると思ってきた

それってなんて付喪神？

つまり擬人化の時代がきた

！！！！！！

(。・)

ということはロストログアにも人格が！？

よっしゃ『無限書庫タン』萌えきたコレ！　ってことなんだよ
おおおおおおお！」

「いや、訳分らないですから！？」

盛大にビアンテがツツコミを入れる。

「だからこそ『無限書庫』！　俺の話を聞いているか！？　よく聞け、これから俺が三秒間目をつぶってやる」

一旦深呼吸するモリ。……昼の司書室に流れる緊張した時間。

「その間に俺の部屋を用意しろ！ でないと、ここを撃つ！」

「って散々言つといて、結局最後はゲスい脅迫かい!？」

「いーち……」

「ああ、直ぐ始めちゃったよ！」

やけくそ気味にビアンテも目をつぶる。

「にー、さーん……」

モリがゆつくりと瞼を開けた。

「……おー、やれば出来るじゃん」

「よ、よかった……」

安心感で腰が抜けそうになるビアンテの横を嬉しそうにモリが抜けていく。

その時、彼女は『無限書庫』のすすり泣く声を聞いた気がした。これがのちの管理局怪談の七不思議の一つになっていくとは、誰にも予想だにできないことであった。

「つてことが、過去にあつてですね」

溜息とともに説明を終えたビアンテは、悲しそうな顔でキムラを見つめた。うん、大丈夫。あなたの感性は正しいわ。あの人はおかしい。でも悲しいことに、ここじゃそれが普通なのよね…… そう、物悲しく彼女の目は語っていた。

「んー、そうだったかもな」

何のこともないように返事をするモリに彼女は溜息をつく。キムラには容易に、彼女が苦労する姿が瞼の裏に思い浮かべることが出来そうだった。

そして彼女が完了、といった感じで書類をはじく。それを見たモリが、そろそろ行くかと腰をあげた。そうだった様子のモリに、静かにビアンテは出発の用意を始める。

「え、今からどこに行こうって言うんです？」

「どこって君の部隊じゃないか？ 要請書には今すぐと書いてあったぞ」

「……は、はあ」

よくわからないキムラは、ただただ頷くしかなかった。

第五話 神々の遊び

『神々を肩を並べるには、たった一つのやり方しかない。神々と同じように残酷になることだ』

サルトル『カリギュラ』より

『第五話 神々の遊び』

モリが向かったのはキムラの所属する38陸士隊であった。キムラは先の話の内容がイマイチ理解できていなかった為、隣を歩くビアンテに聞こうかと思ったが寸前で踏み止まった。理由としては簡単で、ビアンテが魅力的であったからである。これがどうでもいい人間相手であれば、キムラも何の遠慮も無く質問したのだろうがいかんせんビアンテは高嶺の花、凄い美少女であった。

キムラは純粹培養の、言い方を替えればピュアな男の子であった。この世界では地球ほど学校に通う年数が少ないので、そんな男の子が必然的に出てきてしまう。

かと言ってモリにも聞きにくい。先の会話を聞いていてもまともな人とは思えない。見た目が普通の人であるだけに、余計に不思議な人に見える。

「久しぶりだな、ブロちゃん」

「はい、モリ少将もご元気そうだなによりです」

分隊コンビに一人を加えた一行は、隊長室に辿り着いた。中に入
って、丁寧にあやめられたモリはそれを嫌うように手を振る。

キムラはその光景に絶句していた。彼のセカイでは隊長は絶対者
であつたから、その彼がダラしない、普通の人にはしか見えないモリ
に敬語を使うこの状況があり得ないように思えた。先の会話でも、
ビアンテがモリに敬語を使いそうな空気すら無かつた。

「で？ またあいつらがアップを始めたつて聞いたんだが」

モリは隊長室の高級そうなソファに勝手に腰をかける。いや、
確かにこの場では彼の階級が最高級であることは確かなのだが、モ
リがどうしてもそう言う地位にいるようには見えない。

軽く頷いて隊長もモリの対面に座る。自分がどうすればいいか分
からないキムラは扉近くの所にボンヤリと突っ立っているだけだ。
近くには、ビアンテも立っていたのでキムラには辛いとは感じなか
つた。

「ええ、まあ、あそこに居るような奴は大概、もう身寄りが無いか
もう失う物がない様な奴らですから。後の事なんて考えてないんで
しょう」

隊長は顔を歪めて言った。キムラには『奴ら』が誰か推測すらで
きなかつたので、イマイチ彼らが何について話し合っているのか検
討もつかない。

「それもうそろそろ息切れだからな。これが最後かもしれないと思うと少し感慨深い物もあるな」

はははつと笑うモリと真面目な顔を崩さない隊長。キムラには、二人が同じことに関して話し合っているか不安になるほどであった。それ程までに態度というか、空気が違う。

「形だけでも要望を出してくれて助かるよ。最初は勝手にやるなとずいぶん絞られたからなあ」

それほど深刻そうな顔をせずにモリは言い放った。

「それで？ 俺を呼んだってことは、すでに連中は集まってると考えていいのか？」

「はい。相当正確な情報だと思います。恐らくは3、4日後ほどだと……」

「りょーかい、じゃもうぶっ飛ばしていいってことか」

「……そうですね」

キムラにもモリの物騒な話が聞こえたが、それが意味する物はてんでわからない。

「ところで、話は変わるんだけど」

「何ですか？」

モリはソファァーから入り口の方に顔を向けた。そこに居るのはビ

アンテとキムラの2人。

「あのキムラ君、貰っていつでもいいかな？」

『は？』

モリを除く全員の声が重なる。

「いやね、ビアンテ君一人だと何かと彼女も不便だと思ってたんだよね。それにあの部屋は二人だと広すぎるし……」

話に付いていけない出口の2人。隊長は、少し考え込むとモリに質問をした。

「モリ少将、何故彼なのですか？ 何か彼に感じる場所があったのですか？」

「んや？ 彼自身にこう気に入ったとか、どこか優れているとか、そう言うのじゃないんだけどね」

「では、何故？」

そうだなあ、と再びモリは出口の2人を見やる。何かあるかと慌て出すキムラをニヤニヤ見て隊長に向かい合った。

「ま、『観察』に必要ってことかな」

それ以上理由を語らないモリに隊長は諦めたようでした。了解の意を返す。

渦中の男の子は、事態を全く理解していなかったので、ボンヤリ

とそのまさに自分の将来が決定されている現場を見ていた。

この時、ビアンテが微妙な顔をしていたことに、本人を含め全員が気付いていなかったのは幸いなことだったのだろうか？

それは神にも分からないことであつた。

「で、そのまま付いて来たと」

「は、はい。そうです」

緊張を隠せないキムラの態度を全く意識せず、モリはプロちゃん意外と柔軟だなとブツブツ呟いた。

ここは第十一開発衛星の特別飛行場。特別飛行場は民用機などよりももつと質量の大きい軍用機に対応するため、普通の飛行場より丁寧に、しっかりと作つてあつた。

その広い飛行場の管制塔、根元に三人は立っていた。その内訳は分室コンビに、つい先ほど連絡分室に転属することになったキムラである。会話の通り、あの後隊長室を出たモリにキムラは付いていた。

「そんなに緊張するなよ…… こっちにまで移る」

「す、すみません」

「……徐々に慣れればいいよ」

呆れたように言うモリにキムラはまた同じ様に謝ろうとして、慌ててそれを止める。

「で、何で不機嫌そうなの……」

モリが先ほどから不気味な沈黙を保ったままのビアンテに振り返る。この数年間、曲がりなりにもコンビを続けて来た仲だ、大体のことはお互い言わなくても察する程には彼らは気心知れた仲間であった。

モリが何か無茶をした時、小言をいいながらも何とかしてくれるビアンテが今回は何も言わない。しかし、モリを止めるでもなく、顔は不機嫌そうであるものの何も言わず付いてくるビアンテがモリには不安であった。

「いえ、不満など何も無いですが何か？」

通常の人なら彼女が不満を持つてない、はずがない……と思うのだが相手はモリである。もしこれがビアンテ以外の相手であればモリは何も思わなかっただろう。

だがビアンテは一応、モリの秘書と認知される程度にはモリを手伝っていた。いや、手伝っていたといえば語弊があるかもしれない。モリに成り代わって仕事を、文句を言いつつもしてくれていた、といった方が適切であろう。いくらモリが彼女の事を『人間』と思っていたいなくても、感謝の気持ちは持っていた。

「いや、どう考えてもそうには思えないだろう」

何が不満なんだ？ 不満などありません、との問答が数分続いたが、最後はモリが折れて何故か彼女にアイスを奢ることになった。モリには何が起きているのか分からなかった。

ようやく機嫌が治ったビアンテに、キムラとともにここで待つようにモリは指示する。その後、彼は飛行場中央へと歩いていった。

「で、僕たちは何をしにきたんですか？」

キムラが隣のビアンテに尋ねる。それを聞いたビアンテは呆れたような顔を隠そうともしなかった。今日、どれくらいこんな顔を見ただろうかとキムラは落ち込む。

「あんた、そんなことも知らないでここまでついて来たの……」

はあ、とため息をつくビアンテを見てキムラは内心、あの空気で聞けるか！ と突っ込んでいた。あの不機嫌オーラが吹き出している彼女に平気で聞ける人間など一人も居そうにない。神なら居るが。

「……しょうがないわね、説明するからちゃんと聞いときなさいよ」

「わ、わかりました」

年齢はそれ程変わらないのに何故こんなにキツイんだろう？

キムラはそう思ったが、彼女とまともな話が出来るとして真面目に聞こうと彼女に向かい合った。

「うっ、む、向かわなくてもいいわよ」

「は、はあ」

まったく呟きながらビアンテは話し始めた。

「まさかとは思うけど、モリ室長のことは知ってるわよね？」

知ってて当たり前のような雰囲気で聞かれたキムラは、顔を引き攣らせながら知らないと答えた。

「知らない！？ あなた本当に管理世界出身なの！？」

酷く驚くビアンテに、もちろんそうであると答えるキムラ。そこから説明するのかとビアンテはがつくりと肩を落とした。

数分かけて管理局の正式発表をキムラに教える。キムラが大体の所を掴んだ後、やっと今回の任務を説明することになった。

「……で、モリ室長を逆恨みしている奴らが根城にしているのが33管理世界。そして、ここは33管理世界の端に位置する人工衛星基地よ」

ここまでわかった？ と確認するようにキムラの顔を覗き込むビアンテ。その整った顔と女の子特有の甘い匂いに、キムラは顔を赤くしながら頭を上下に振る。

「何回も奴らの隠れ家を潰してきたんだけど、やっとこれで最期にできそうなのよ……」

これまでの経緯を大体把握したキムラはなるほど頷く。

「つまり、これでテロとの闘いに勝てるということですね？」

まあね、とビアンテが笑う。

「……にしても残った人たちは何を考えているのかしらね？」

と不思議そうに首をかしげるビアンテにキムラは違和感を感じる。

「残る、というのは？」

ああ、その事と頷いた彼女は、なんてことのない様に答えた。

「再三の退避警告にも関わらず残ったバカがいるのよ、シンパが何か知らないけどバカなことをするわよね」

キムラにはしばらく、彼女の言葉の意味が分からなかった。

「それは、どういう意味……」

「33管理世界の政府が何故だか引き渡しを渋ったのよ。だから、調子にのったテロリストたちがわんさか集まって来ちゃって。だいたい前に避難勧告をだしたのにまだ残ってる住人もいるみたいだし。」

あ、室長が打つわよ」

キムラが更に疑問の声を上げようとしたその時、目の前がまっしろになる。一瞬、この世界が壊れてしまったかの様な錯覚にも陥るほどのその衝撃は、数秒で終わる。

「いつ見ても非常識ね」

呆れたような笑みを浮かべる彼女とは正反対にキムラは何が起こったのか混乱しっぱなしであった。

「え、え、いや、今ので」

「ええ、今のでテロリストは全滅したと思うわ」

ふっと、肩の荷が下りたような安心した声をビアンテは出した。

「そんな……」

今の一瞬で、多分、大勢の命が無くなった。それは事実なのだ、悲しむべき事だ。

非殺傷設定なんて物がある訳で、管理局は犯罪者をいきなり殺しに行くような組織では無い。基本理念として、そう言った『命を尊重する』ということは徹底している。

であるからして、キムラの場合、学校では『殺し』はいけない事だ、と習ったのである。

しかし、この現実は何だ？ 今、一瞬で、消えていった命は救えない物だったのか？

グルグルと周る頭。キムラは確かに混乱していた。

そんな様子をやはりあきれた様子でビアンテは見る。

「あのね、あなたが何を考えているかは大体分かるけど……」

近くからの足音を聞いて、ビアンテは前を見る。そこにはちよつと近くの煙草屋に行ってきた、みたいなノリで帰ってくるモリの姿があった。

「や、どうだったよ、キムラ君」

シユタつと右手を挙げてモリは先の感想を聞く。そこには後輩が現実に直面したから氣遣うとか、そういう気持ちは皆無であった。

「え、いや、どうって」

「うんうん、感動して言葉も出ないか」

くしゃくしゃとモリはキムラの頭をなでる。う、う、と呻きながらなされるがままのキムラの心はある一つの感情に支配されていた。

それは、恐怖であった。

「なんでキムラ君、来ないんだろうねえ」

翌日、いつもの無限図書分室で二人はソファ―に座っていた。それはいつもの分室コンビであり、キムラはここには来ていなかった。

本心から素直に疑問を口に出したモリにビアンテはもう何度ついたか分からない溜息をついた。この人は人の心なんて考えてないんだろうなあ、とビアンテは思う。

だが、それは正確ではない。彼は人と思ってないのだ。

このすれ違いがどう未来に影響するのか。

それは、神次第である。

第六話 ある一般人の憂鬱

「あーうー」

キムラは憂鬱であつた。

薄暗い自室のベット、その大層くたびれた様子の布団にくるまりながら何度打ったか分からない寝返りをうつ。

サボってしまった……そう、キムラは人生初のサボり、それも転属早々にサボってしまったのであつた。

キムラはピュアである。そして、真面目であつた。それはもうドがつくほどに。

そんな男だから今の今まで、学校もサボった事もなく皆勤とまでは行かないが休んだ時々にはそれなりの理由があつた。勿論、卒業し管理局に入ってからもそうである。新入り歓迎の飲み会で、未成年を理由にお酒を飲まないと言いきった時は、先輩にさえあきれたものだった。

だから、そういう事態になつた時の経験が全くない。たかが一日サボっただけとは考えられないのだ、それこそ世界の終わりの様な顔をキムラはしていた。

何度も、睨めつけるように枕近くの時計を見るもその針はすでに正午過ぎを指している。朝からずっとその調子なのだが、どうも職場に出る気にはならなかつた。

彼が職場に出ない理由。それは、先日見たモリ室長のジェノサイドである。まさしく大量殺戮であつた。

頭に、彼はただ犯罪者に罰を与えただけなのだ、と言いつ聞かせるのだがどうもすんなりいかない。

武装隊の隊長はそう命を軽くは扱わなかった。いくら凶悪な指名手配犯だったとしても、いくら自分たちの身が危険にさらされても、彼は最後まで命を助けようとしていた。その様子を身近で眺めて、憧れていたためにさらにモリ室長のしたことが不安であった。

別に犯罪者全てを助けたい、なんてことではない。今まで学校で教わってきたこと、そして武装隊で当たり前であったことがいとも簡単に覆されたことにキムラは恐怖したのだ。それとあの強烈なビームを持つモリ自体にも少しばかりの恐怖を覚えたりもしたのだが、まあその影響は微々たるものだろう。

つまるところ彼は不安だったのだ。

と一通りの事を考えて、もんもんとしていたキムラであったが、突然になった玄関のチャイム音に体が飛び上がった。

『ピンポーン』

いつまでたってもこの音には慣れそうもないとキムラは嘆息する。陸士が住むこのアパートは、この新暦にあつて前世紀？　とでも首をかしげたくなるほどのオンボロさで有名であった。普通の家ならば標準装備されているはずの対面式インターフォンも備わっている訳もなく、耳に障る音で来客を告げるだけだ。

（一体、誰が来たんだ？　まさか隊長？）

まだ陸士隊に入っただばかりのころに色々世話を焼いてもらった事を思い出しながら、キムラは玄関へと急ぐ。

「はい、一体どな、ヒッ！」

隊長か、隊員の先輩方がまた絡みにきたかと思いながら開けるも、目の前には昨日会ったばかりの女性、そして同僚のはずのビアンテがむすっとした顔で仁王立ちしていた。その不機嫌そうなオーラに当てられたキムラは、口から空気の漏れるような声を上げる。

ビアンテは昨日、見た制服を少しゆるく着こなし、腕組みこちらを観察するように眺めている。待てども一向に言葉を発しないビアンテに焦れたキムラは恐る恐るこえをかけた。

「あ、あの…… おはよう、ございます？」

「こんにちは、が正しいわよ。もう二時だし」

かぶせるようにビアンテが言い放ちキムラがつらたえる。そんな様子を見たビアンテは深く溜息をついた。

「まあいいわ。ランチはもう食べた？ まだなら一緒にどう？」

と言いながらビアンテは何か食べ物が入っているであろう袋を持ちあげる。

「立って話すのもなんだし、上がらせてもらっわね」

「え、え？」

「大丈夫よ、汚くても気にしないから」

「き、ビアンテさんが気にしなくても僕が気にします!」

堂々と上がり込もうとするビアンテとの間に体を差し込みながら、キムラが悲鳴を上げる。なんやかんやあってそれから数十分後、気まずそうに正座しながら目線をうつろさせるキムラと、コンビニ弁当を頬張るビアンテ。キムラはこれまでにないほど気まずい思いをしている目の前で、ビアンテは遅めの昼食をとっていた。

大体、ご飯が三分の二ほど減りお茶を飲んで一息ついているビアンテを見て、キムラは意を決して話しかけた。

「……怒らないんですか?」

「? ああ、サボったことね」

「さ、サボった……」

「サボったんじゃないの? 今日?」

「いえ、確かにそうなんですが言葉にすると何だか急に現実的に」

胃をさするキムラに、やわいわねえと呆れた顔をするビアンテ。その様子をしばらく眺めていたビアンテだが、ふと、何でもないように言葉を漏らした。

「でも、勤務初日は明日じゃなかったっけ?」

「へ?」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をするキムラを、面白そうにビアンテは眺めた。

「ほら、ここ」

どこからともなく出した転属の書類には、確かに今日の日付……、の上に雑に二本線が引かれ、その上には明日の日付が殴り書きされていた。

「い、いやいやいや、これ、明らかに書き直してますよね！？ それにこれビアンテさんの字じゃないんですか！？」

「そう？ もともとそんな感じだったんだけど」

「な訳ありますか！ こんなの上に通る訳ないじゃないですか！？」

「それが通るのよ。上司が、あの、モリ室長よ」

「……ああ、なるほど。……確かに通しそうです、がそういうことじゃなくて！」

「ああもう！ ごちゃごちゃうるさいわね！ この書類をこり押しすれば、あんたがサボったとかそういう事実は無くなるの！ それじゃあ不満！？」

「い、いや、いやとかじゃなくてですね」

ビアンテの剣幕に押され気味のキムラ。確かにそれが通ればサボりにはならないが、そんな力技でいいのだろうか？

「じゃあ、いいじゃない！ 何、まだ文句あるの？！」

ぎろりと睨めつけられたキムラはフルフルと首を横に振った。

「なら万事解決ね。……所で、あなたどうして初日からふけようと思ったのよ」

聞く分には真面目な奴と聞いていたのに、と呟くビアンテにキムラはポツリ、ポツリと自分の不安を吐露していった。

「なるほどね…… つまり、温室育ちの坊ちゃんが世間の荒波に揉まれて、怖くなってひきこもったと」

「いや、そんなことは…… いえ、その通りです」

言葉にしてみれば、確かにその通り、情けない奴だなあとキムラは自嘲する。

「それと、モリ室長が怖い、ね」

うーんと考え込むビアンテをキムラは不安そうに見つめる。
数秒して、ビアンテはキムラに向き合い、話し始めた。

「私がモリ室長の所に生贄……、いえ、転属になってから数年がもう経つけど、そうね、確かに今でも室長のアレは怖いわ」

何やら危なそうな単語が聞こえるも、キムラは今までの経験から

無視を決め込む。完全に馴染んでいるように見えたビアンテにしても、あのモリという名の訳分からぬ人物に恐怖を抱いてると知って、キムラは驚きを隠せなかった。

「でも、それは私たちが常に持つてる類の物よ。例えば、そう、明日地震がきたらどうしよう、とかね」

ビアンテは、なるほど天災とはいいい例だったわねと自画自賛する。

「天災？」

キムラの疑問に、ええと頷くビアンテ。天災は防ぎようがない物、それを怖がっているばかりじゃいいことなんか一つもない。天災は、備える物。怖がるものじゃないと説くビアンテに、キムラはなんだか心が軽くなっていくのを感じた。

それに……、と最後にビアンテが付け足すように言う。

「あなたには書類仕事を手伝ってもらわないと。うちの室長の、働かないことしたらありやしないわ」

スーと手を伸ばすビアンテ。それは、地球では握手、と呼ばれるものであった。

「だから、ね？ 私を助けると思って」

満面の笑みを浮かべる美少女に、キムラは顔を赤く染めながら機械のようにコクリコクリと首を上下にふる。

あまりの恥ずかしさに、顔をうつむき耳を真っ赤にしながらビアンテとキムラは握手を交わした。キムラの、本当の意味での”転属”が決まった瞬間だった。

この時、もしキムラが顔を上げていれば、どこぞの新世界の神ばりに嗤った顔のビアンテが見えただろう。

キムラ・クニオ、ピュアな青年であった。

時間は少し遡る。ビアンテが分室に転属してちょうど一年がたった頃の話である。

「室長ー！　またサイン待ちの山が出来てますよ！　そろそろ崩れますー！」

「ああ、そこに置いといてー」

「だ・か・ら！　そうしてるから山ができるぐらい書類が溜まるんでしょ！　室長はサインするだけなんですから、サインぐらいめん

どくさがらずにしてくださいよ！」

叫ぶビアンテに耳をふさぐモリ。キーンという高音が鳴りやむの待って、モリはやつと古い地層辺りから化石の様な書類を引っ張り出し、のそりのそりと書類を処理していった。

そして手を止める。キツと鬼の様な顔で睨むビアンテを見て、いやいやそんな顔をするモリであったが、ふと思い出したかのように声を上げた。

「ああ、そうそう。この前の宿題、ビアンテ君のデスクの上に置いたから」

「了解です。……なんで、仕事サボってるのに、勉強は真面目にするんですか……」

ぼやきながらも、ビアンテはデスクに向かいモリの宿題を採点していった。

モリは、管理局ではエリート（であつたはず）のビアンテから魔法について講義を受けている。何しろ、最初は文字を習う所から始めたのである。そういった事情を考えれば、もう一年で中学校に当たる部分まで勉強を進めれたのは順調といってもいいだろう。

その要因として、ビアンテが人に教えることを得意にしていたことがあげられるが、何と言っても本人のやる気が一番の要因であった。教師がいくら有能でも、生徒にやる気がなければどうしようもないのである。

「にしても、こっちの魔法って奴はほんと数学って言うか、プロگرامみたいだな」

書類にサインをしながら、モリが彼女に話かける。

「まあ、それはそうですね。魔法、といっても動力が魔力素だけです。体系的な物を扱うとなるとどうしても、それっぽくなるんじゃないですか？」

マルチタスクが基本の魔法少女としては、採点しながらおしゃべりなんていうのもお茶の子さいさいである。モリは、その存在を知った時、気違いじみている、との一言で吐き捨てたが。

話題が無くなったのか、沈黙が二人の間に降りる。もう二人っきりの分室に勤めて早一年、二人は沈黙が気まずくないほどには打ち解けていた。

「ん？」

採点をしていたビアンテは見慣れない書類がデスクにあるのを見つけて、手を止めた。内容は召喚状、それも催促に催促を重ねているらしい。それもずいぶん前からだ。どこその組織が、とその呼び出されている会議の名前を見て、ビアンテの動きが止まった。

「モ、モリ室長……」

「ん？ ないだい、そんな昼間に幽霊見たような声を出して」

サインを続けながら、片手間にモリは尋ねる。

「ん？ なんだい？ じゃないですよ！ こ、これ提督会議じゃないですか！？ 召喚状が来てますよ！ ああ、もう、なんかすっごく催促してるし！」

見て見ると、再々……催促と、どれくらい期間呼ばれ続けていることに気付いたビアンテは顔を青くした。思わず、次の転属先をシュミレーションしてしまったほどである。

「提督会議？ ああ、あのババアか」

「ババア!？」

どう考えてもそのババアなるものは提督位を持つ人物を指しているようであった。この一年、規格外な経験を積んできたビアンテであるが、今でも新しい発見、というか問題にぶち当たることがままある。

「差出人の名前、リンディ・ハラオウンだろ？」

「そ、そうですね、そうなってます」

確かに、召喚状にはリンディ・ハラオウンのサインがあった。その前も、その前前も……どうやら、すべての召喚状に彼女の名前があるようである。

リンディ・ハラオウン……その名前に、ビアンテは何故か引っかかりを覚える。

（リンディ・ハラオウン？ ハラオウン、ハラオウン……あ！）

もう転生して十数年になり、霞のごとくぼんやりとしてきた原作知識であるからしてビアンテは、彼女がどんな登場人物だったか詳細は覚えていなかった。しかし、思わぬ原作登場人物とめっちゃくちな室長の接点に、いやな予感しかない。

冷や汗を流しながらその書類をめくっていくと、あまりのしつこさにビアンテの顔がだんだん気持ち悪そうな顔になっていく。

「室長、なにかあったんですか？」

何もない訳がないだろう、ビアンテはそう思いつつもとりあえず聞いてみることにした。

「うん、昔ね、ちょっといざこざがあつてね。まあ、逆恨み、って訳でもないのかー、あちらさんからしてみれば敵になるのかな」

敵という言葉に、ビアンテは事情が大体想像できてしまった。犯罪者の親族か、何かなのだろう、彼がそういった関係でテロなどで狙われることも多い。最近は少なくなってきたが。

「なんだかあの人、手段が目的化してきてるんだよねー。人は忘れる生きものののに、ああ、人じゃなかったか」

「人じゃない？」

「ん？ ああ、ビアンテ君は関係ないよ。とりあえず、召喚状は捨てていて」

「いいんですか？」

「うん、大丈夫、大丈夫。ビアンテ君も何か嫌がらせされたら言うんだよー、とりあえず消しとくから」

「……何を、どう消すかは聞きません」

いいのだろうか、だめじゃないか？ …… まあいつか、室長がい
いつていつてるんだし。

三秒ほど考えたビアンテは結局、その催促状だけでひと山できそ
うなそれらを捨てることにした。

なお、二年目程からはもったいないとして、メモ代わりとして分
室では便利に使われていくこととなる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8044p/>

神は死んだ！ 【リリカルなのは二次創作 オリ主転生最強物】

2011年2月4日05時17分発行